

## 『出雲国造神賀詞』奏上儀礼の成立

大浦 元彦

はじめに

ひろく「国造」制に関する研究は、これまで相当な量の<sup>(1)</sup>のぼるとともに研究としては最も充実した分野の一つともいえる。

ところで本篇の課題とする出雲国造についてはこれまで国造研究の不可欠な一環として常に注目を集めてきた。<sup>(2)</sup>その特徴を一言でいえば、『記・紀』神話・『出雲国造神賀詞』奏上の検討を通して、出雲国造を諸国造の中できわめて「特殊な形態」・「例外的なもの」として取り扱ってきた点にあると思われる。なお最近においても八世紀初頭、即ち大宝令制定前後における出雲国造について高嶋弘志氏・篠川賢氏等が詳細な検討を加えているが、ここでも出雲国造は「特殊なもの」としてとらえられている。

まず高嶋弘志氏は、出雲国造が意宇郡大領を兼任し、またその本拠地が「神郡」という特殊な領域に設定されていることに注目して大宝令制定によっても否定されなかった例外的な国造、即ち「特殊な存在」と捉えられたのである。

また、篠川賢氏は『出雲国造神賀詞』奏上を通じて、出雲国造を旧来の国造（氏姓国造）の代表として天皇（朝廷）に服従を誓約させ、一方律令国家は「国造」制廃止後も服属儀礼としての側面を残すために国家の政策によって特に存続させたものである」とされている。いずれも「神郡」および『出雲国造神賀詞』奏上をもって出雲国造を「例外的なもの」・「特殊なもの」と呈なしておられるのである。

「神郡」については多少考えたことがあるので、<sup>(3)</sup>ここでは神賀詞奏上儀礼を取り上げ、『出雲国造神賀詞』奏上と律令天皇制との関連性を探るとともに、あわせてイズモ地域史についても触言してみたいと思う。

出雲國造神賀詞奏上儀礼の成立（大輔）

なお、『出雲國造神賀詞』奏上そのものに関する研究は意外に乏しく、「出雲國造の交替に当って行なわれる新出、雲國造の天皇への服属儀礼」（『神道大辞典』）という理解に集約されるといっても過言ではない。

確かに「神賀詞」奏上に、出雲國造の服属儀礼としての側面があったことは事実であるが、この儀式を出雲新國造

就任！その報告と天皇に対する服属関係の再確認という側面からのみ捉えるのは問題を一面化する恐れがある。そこでまず「神賀詞」奏上の基礎史料を提示し、以下便宜上簡略な表を作製し、律令天皇と出雲國造の関係を考える素材とすることとしたい。

表 I

記 事	表 II	年 月 日	出 典
(A) 元正天皇即位 出雲臣果安奏上	a	靈龜元（七一五）・九・二 靈龜二（七一六）・二・十	『統日本紀』 〃
(B) 出雲臣広嶋奏上 聖武天皇即位 出雲臣広嶋奏上	b c	神龜元（七二四）・正・二十七 神龜元（七二四）・二・四 神龜三（七二六）・二・二	『統日本紀』 〃 〃
(C) 出雲臣弟山國造任命 孝謙天皇即位 出雲臣弟山奏上 出雲臣弟山奏上	d e	天平十八（七四六）・三・七 天平勝宝元（七四九）・七・二 天平勝宝二（七五〇）・二・四 天平勝宝三（七五一）・二・二十二	『統日本紀』 〃 〃 〃
(D) 淳仁天皇即位 出雲臣益方國造任命 称徳天皇即位 出雲臣益方奏上	f	天平宝字二（七五八）・八・一 天平宝字八（七六四）・正・二十 天平宝字八（七六四）・十・九 神護景雲元（七六七）・二・十四	『統日本紀』 〃 〃 〃

(F) 出雲臣益方奏上 光仁天皇即位 出雲臣國上國造任命	g	神護景雲二（七六八）・二・五 宝龜元（七七〇）・十・一 宝龜四（七七三）・九・八	『統日本紀』 〃 〃
(G) 桓武天皇即位 出雲臣國成奏上 出雲臣國成奏上	h i	天応元（七八一）・四・三 延暦四（七八五）・二・十八 延暦五（七八六）・二・九 延暦九（七九〇）・四・十七	『統日本紀』 〃 〃 『統日本紀』
(H) 出雲臣人長に外従五位下を授ける （遷都に伴なう神賀詞奏上） 出雲國造神賀詞奏上 （人名の記載なし）	k	延暦十四（七九五）・二・二十六 延暦二十（八〇一）・閏正・十六	『類聚國史』 〃
(I) 出雲臣門起に外従五位下を授ける 平城天皇即位	k	延暦二十四（八〇五）・九・二十七 大同元（八〇六）・五・十八	『日本後紀』 〃
(J) 嵯峨天皇即位 出雲臣旅人奏上 出雲臣旅人奏上	l m	大同四（八〇九）・四・十三 弘仁二（八一二）・三・二十七 弘仁三（八一三）・三・十五	『日本後紀』 〃 〃
(K) 淳和天皇即位 出雲臣豊持國造任命 出雲臣豊持奏上	n	弘仁十四（八二三）・四・二十七 天長三（八二六）・三・二十九 天長七（八三〇）・四・二	『類聚國史』 〃 〃
(L) 仁明天皇即位 出雲臣豊持奏上	o	天長十（八三三）・三・六 天長十（八三三）・四・二十五	『統日本後紀』 〃

（一）

表1は出雲國造の任命、及び「神賀詞」奏上と天皇即位時期を示したものである。

右の表のうち、予めいくつかの注意点を摘記すると(A)～(L)の如くである。

- (A) 元正天皇即位の翌年二月に果安によって「神賀詞」が奏上されていることを示す。
- (B) 聖武天皇即位の前月と翌年二月に広嶋によって奏上されていることが知られる。
- (C) 孝謙天皇即位の翌年二月と翌々年二月に弟山によって奏上されていることがわかる。
- (D) 称徳天皇即位の年正月に益方を國造に任命し、三年後の神護景雲元年二月とその翌年二月に益方によって、「神賀詞」奏上が行なわれている。
- (E) 光仁天皇即位の四年後に國上を國造に任命している。
- (F) 桓武天皇即位の四年後、延暦四年二月とその翌年二月に國成によって奏上されていることがわかる。
- (G) 桓武朝において、延暦九年四月に人長を國造に任命し、五年後の延暦十四年二月に人長に外従五位下を授けている。(遷都に伴う「神賀詞」奏上)
- (H) 平城天皇即位の前年、延暦二十四年九月に門起に外従

五位下を授けている。

(J) 嵯峨天皇即位の二年後、弘仁二年三月とその翌年三月に旅人によって奏上されている。

(K) 淳和天皇即位の三年後、天長三年三月に豊持を國造に任命し、その四年後の天長七年四月に奏上されているのがわかる。

(L) 仁明天皇即位の天長十年三月の翌月に豊持によって奏上されていることが確かめられる。

なお(D)については淳仁天皇の即位時期に國造の任命あるいは「神賀詞」奏上にあたる記事が存在せず、確認することができなかった。

以上、(A)～(L)に指摘したごとく、これまで通説と考えられてきた『出雲國造神賀詞』奏上儀礼の意義、即ち神賀詞の奏上を「前任國造」が亡くなり、「新任國造」が新たに就任した時に天皇に対して行なわれる服属儀礼と整理する従来の研究には根本的問題があろう。そこで私は右の点に關連して次の三點に注目していきたいと思う。

① 任出雲國意宇郡大領「專

右被大納言從三位神王宣稱奉勅。昔者國造郡領職員有別。各守其任不敢違越。慶雲三年以來令國造帶郡領。寄言神事動廢公務。雖則有闕意。而不

加「刑罰」。乃有私門日益不私公家。民之父母還為巨蠹。自今以後。宜改旧例。國造郡領分職任之。

延暦十七年三月廿九日

右の太政官符から、出雲國造は慶雲三年（七〇六）から意宇郡大領を兼任しており、また『出雲國風土記』卷末・『出雲國計会帳』にも「國造帶意宇郡大領外正六位上勲十二等出雲臣広嶋」とあって、ここでも國造郡領を兼任していたことが知られる。しかし、郡領の任期は「終身之任」であるにもかかわらず「神賀詞」奏上記事を見ていくと、國造が死亡したための國造交替とは考え難い。むしろ天皇が新たに即位した際に、出雲國造が強制的に交替させられているように思われてならないのである。もしこのような理解が認められるとすれば、出雲國造による「神賀詞」奏上は國造職繼承に伴う服属儀礼というよりは天皇即位儀礼と不可分の關係にあつて天皇即位儀礼の一翼を荷わされていたのではあるまいか。この点を示唆するのは『出雲國造神賀詞』そのものである。『出雲國造神賀詞』（『延喜式』卷八神祇國造神賀条）の内容を要約してみると次の通りである。（「神賀詞」は大きく分けて三段から成る）

第一段

出雲國造が、天皇の大御世を手長の大御世と斎うため

に、加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐大穴持命を始めとする百八十六社の皇親を祭り、神々からの返事である神賀吉詞を奏上すると奏す。

第二段

④ 天孫の降臨に先立ち、國造の祖神の天穗比命が大八島國の國狀視察に遣わされて復命し、己が子である天夷鳥命に布都怒志命を副えて天降らせて、荒ぶる神を平らげ、大穴持命をも鎮めて、統治權を譲らせた。

⑤ 大穴持命が申すに「大倭國は皇御孫命の鎮まる所である」とし、大倭に自分の和魂と四神を皇孫命の近き守り神として貢つておき、杵築の宮に鎮座した。

⑥ そして、天穗比命は天皇の手長の大御世を立派な御世として斎いまつれと申されたのを代々受け継ぎ、「御禰の神宝」を献上すると奏す。

第三段

白玉・赤玉・青玉・横刀・白馬・白鶴・倭文・鏡と御禰の神宝をささげ、天皇の御世の平安を願い、伝わってきた神賀吉詞を奏上すると奏す。

かかる神賀詞のうち第二段などは『記・紀』神話の大國主神の國譲りが反映された儀礼と考えられる。國造が新任の際に服属儀礼として奏する内容というよりは、強調される「天皇の大御世」「天皇の平安」等の文意が各所で重要

出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立（大浦）

な位置を占めているように思われる。この点について新野直吉氏は「神賀詞」を「国造が地方豪族の服属者として、神詞・賀詞を奉って聖壽を祝福したことは氏姓時代にもあったであろう。（中略）国家的大事に出雲国造が諸国造を代表して神賀詞を奏上するのはおかしくはなく、またこの儀礼を出雲国を代表する国造の儀礼と解せず、律令国造代表としての出雲国造の儀礼である」とする。即ち「神賀詞」を律令国造の代表の賀詞としている点は興味深い。そこで注目されるのが『続日本紀』大宝二年（七〇二）の次の史料である。

是日為<sub>レ</sub>班<sub>二</sub>大幣<sub>一</sub>馳<sub>レ</sub>駅道<sub>二</sub>諸国々造等<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>京<sub>（16）</sub>。

これは大宝二年「大幣」を班つたために「国造」を京に召集したものである。この國造入京については「大奉幣」、「大宝律令完成の奉祝」「文武の即位祭儀」とする説などがあるが、それが文武の即位と密接な関係にあったことは、矢野建一氏の論考で明らかである。ここでは大宝二年（七〇二）の記事と、「神賀詞」奏上との類似性に注目してみたいと思う。

まず大宝二年二月十三日に諸国国造等が中央に参集しており、また同年三月十二日には

鎮<sub>二</sub>大安殿<sub>一</sub>大板。天皇御<sub>二</sub>新宮正殿<sub>一</sub>齋戒。物頒<sub>二</sub>幣帛<sub>一</sub>於畿内及七道諸社<sub>（17）</sub>。

とあって、大板が行なわれると同時に幣帛を畿内七道諸社に頒けられていたことがわかる。また、大宝二年三月十一日には「中臣朝臣意美麻呂、忌部宿禰子首、中臣朝臣石木、忌部宿禰伯麻呂、菅生朝臣国粹、巫部宿禰博士、忌部宿禰名代」に対して叙位が行なわれている。これは、「大板」の執行に動きのあった神祇関係者を対象とした叙位であると思われる。右の叙位者の内で特に注目されるのは忌部宿禰子首である。子首は和銅元年（七〇八）三月「出雲守」に任命されている<sub>（18）</sub>。「神賀詞」奏上の初見が靈龜二年（七一六）であり、忌部宿禰子首の出雲国守任期中と一致し「神賀詞」奏上儀礼と忌部氏との関連性が想定されよう。このことについては天平五年（七三三）成立の『出雲国風土記』に次のようにあるのも注目される。

忌部神戸 郡家西廿一厘二百六十步 國造神吉詞望 参<sub>二</sub>向朝廷<sub>一</sub>時 御沐之忌里 故云<sub>二</sub>忌部<sub>一</sub>。

即ち出雲国造の齋齋期間中に身を清めるための地として忌部神戸の地名由来が問題とされているがここは出雲国造の

本拠地であり、国府の設けられた意宇郡内に忌部神戸が設定されていることから、忌部氏と「神賀詞」奏上は無関係であるとは考え難いのである。

以上の点から

(1) 大宝二年の諸国々造等の召集・大板の執行、神祇関係者に対する叙位の内に忌部宿禰子首が確かめられる。

(2) 出雲国内に忌部神戸の存在が確認され、和銅元年には子

首は出雲国守に任命されている。また、忌部神戸内に「神賀詞」奏上の際の齋齋の場が存在している。

(3) 表Iより「神賀詞」奏上の時期は、天皇即位時期と不可分の関係にあることが窺がわれ、そのほとんどが二月に集中して行なわれている点を、大宝二年の諸国々造召集と切り離して考えるのは困難なように思われる。

(4) 大宝二年以降諸国々造の中央への召集が史料に全く見え

表II

\* 頭注に「社、一本作寶」とある。

a	出雲国々造外正七位上出雲臣果安齋奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。神祇大副中臣朝臣人足。以其詞奏問。是日。百官齋焉。自 <sub>二</sub> 果安 <sub>一</sub> 至 <sub>二</sub> 祝部 <sub>一</sub> 。一百一十余人。進 <sub>レ</sub> 位賜 <sub>レ</sub> 祿各有 <sub>レ</sub> 差。
b	出雲国造外從七位下出雲臣広嶋奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。広嶋及祝神部等授 <sub>レ</sub> 位賜 <sub>レ</sub> 祿各有 <sub>レ</sub> 差。
c	出雲国造從六位上出雲臣広嶋齋事畢。献 <sub>二</sub> 神社 <sub>一</sub> 鏡并白馬嶋等 <sub>一</sub> 。広嶋并祝二人並進 <sub>二</sub> 位 <sub>一</sub> 二階 <sub>一</sub> 。賜 <sub>二</sub> 広嶋 <sub>一</sub> 施 <sub>二</sub> 廿疋 <sub>一</sub> 。綿五十疋 <sub>一</sub> 。布六十端 <sub>一</sub> 。自余祝部一百九十四人祿各有 <sub>レ</sub> 差 <sub>（19）</sub> 。
d	天皇御 <sub>二</sub> 大安殿 <sub>一</sub> 出雲国造外正六位上出雲臣弟山奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。授 <sub>二</sub> 弟山 <sub>一</sub> 外從五位下 <sub>一</sub> 自余祝部叙 <sub>二</sub> 位 <sub>一</sub> 有 <sub>レ</sub> 差。並賜 <sub>二</sub> 施 <sub>一</sub> 綿。交各有 <sub>レ</sub> 差。
e	出雲国造出雲臣弟山奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。進 <sub>レ</sub> 位賜 <sub>レ</sub> 物。
f	出雲国造外從六位下出雲臣益方奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。仍授 <sub>二</sub> 益方 <sub>一</sub> 外從五位下 <sub>一</sub> 自余祝部等。叙 <sub>レ</sub> 位賜 <sub>レ</sub> 物有 <sub>レ</sub> 差。
g	出雲国造外從五位下出雲臣益方奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。授 <sub>二</sub> 外從五位上 <sub>一</sub> 。賜 <sub>二</sub> 祝部男女百五十九人 <sub>一</sub> 爵各一級。祿亦有 <sub>レ</sub> 差。
h	出雲国々造外正八位上出雲臣國成等奏 <sub>二</sub> 神吉事 <sub>一</sub> 。其儀如 <sub>レ</sub> 常。授 <sub>二</sub> 國成 <sub>一</sub> 外從五位下 <sub>一</sub> 自外祝等。進 <sub>レ</sub> 階各有 <sub>レ</sub> 差。
i	出雲国国造出雲臣國成奏 <sub>二</sub> 神吉事 <sub>一</sub> 。其儀如 <sub>レ</sub> 常。賜 <sub>二</sub> 國成 <sub>一</sub> 及祝部物。各有 <sub>レ</sub> 差。

j	出雲国々造外正六位上出雲臣人長特授 <sub>二</sub> 外從五位 <sub>下</sub> <sub>一</sub> 。以下縁 <sub>二</sub> 遷都 <sub>一</sub> 奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 也。 出雲国造奏 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 。
k	出雲国造外正六位上出雲臣門起授 <sub>二</sub> 外從五位 <sub>下</sub> <sub>一</sub> 。
l	出雲国造外從七位下出雲臣旅人授 <sub>二</sub> 外從五位 <sub>下</sub> <sub>一</sub> 。縁 <sub>二</sub> 神賀事 <sub>一</sub> 也。
m	御 <sub>二</sub> 大極殿 <sub>一</sub> 。出雲国造外從五位下出雲臣旅人奏 <sub>二</sub> 神賀辭 <sub>一</sub> 。并有 <sub>二</sub> 献物 <sub>一</sub> 賜 <sub>二</sub> 禄如 <sub>レ</sub> 常。
n	皇帝御 <sub>二</sub> 大極殿 <sub>一</sub> 。覽 <sub>二</sub> 出雲国々造出雲臣豊持所 <sub>レ</sub> 献 <sub>二</sub> 五種神宝 <sub>一</sub> 。兼所 <sub>二</sub> 出雜物 <sub>一</sub> 。還 <sub>レ</sub> 宮授 <sub>二</sub> 豊持從六位 <sub>下</sub> <sub>一</sub> 。
o	出雲国司率 <sub>二</sub> 国造出雲豊持等 <sub>一</sub> 奏 <sub>二</sub> 神壽 <sub>一</sub> 。并献 <sub>二</sub> 白馬一匹。生鷄一翼。高机四前。倉代物五十荷 <sub>一</sub> 。天皇御 <sub>二</sub> 大極殿 <sub>一</sub> 。受 <sub>二</sub> 其神壽 <sub>一</sub> 。授 <sub>二</sub> 国造豊持外從五位 <sub>下</sub> <sub>一</sub> 。

なくなるが、これは「神賀詞」奏上の出現とならからの  
連関性を持つものと思われる。

ではここで六国史に見える「神賀詞」奏上記事そのもの  
について検討を加えてみたい。

## (二)

a～oは六国史中に見える『出雲国造神賀詞』奏上記事  
の全てである。

ところで従来多くの研究が『出雲国造神賀詞』奏上を服  
属儀礼として捉えられてきた根拠の一つに神宝献上があげ  
られる。

出雲国造によって献上される「神宝」は『延喜式』の「国

造神賀詞」の中に見える「神宝」即ち「白玉・赤玉・青玉  
・御横刀・白御馬・白鷄・倭文・御鏡」であり、神龜三年  
の広嶋奏上の際の「神宝劔鏡并白馬鷄等」、天長七年の豊  
持奏上時の「所献五種神宝」のみである。『日本書紀』崇  
神天皇六十年秋七月、垂仁天皇廿六年秋八月の神宝檢校記  
事中の神宝の授受も「神宝檢校<sub>二</sub>服属<sub>一</sub>」という見地に立脚  
し、解釈されているように思われる。この点が『出雲国造  
神賀詞』奏上を服属儀礼とみなす要因となっているが、大  
宝令制定以後六国史中で「神宝」献上が確認できるのは、  
先の神龜三年広嶋奏上、天長七年豊持奏上、また「神宝」  
と明記されていないが、弘仁三年旅人奏上の際の「有<sub>二</sub>献  
物<sub>一</sub>」、さらに天長十年豊持奏上時の「献<sub>二</sub>白馬一匹、生鷄一

翼、高机四前、倉代物五十荷<sub>二</sub>」の四例のみである。瀧音能  
之氏は、「豊持の奏上については『延喜式』に見られる奏  
上規定の形がほぼこの時期にはき上つていた<sup>(16)</sup>」と述べら  
れているが、これは『延喜式』臨時祭式の寿詞に見える品  
目と豊持の献物との比較によって導き出された結論である。  
しかしここで注目されるのは、神龜三年の広嶋奏上である。  
初見記事である果安の奏上の際にも、豊持奏上以外の  
いずれにも見られない「神宝」献上が特筆されている点が  
注目されよう。

この事と関連して注意されるのが、前節でも触れた忌部  
氏の存在である。令制下における中央忌部氏の性格及び職  
掌について考えてみると、『養老』神祇令には、

其祈年月次祭者、百官集<sub>二</sub>神祇官<sub>一</sub>、中臣宣<sub>二</sub>祝詞<sub>一</sub>、忌部  
班<sub>二</sub>幣帛<sub>一</sub>、<sup>(17)</sup>

凡踐祚之日、中臣奏<sub>二</sub>天神之寿詞<sub>一</sub>、忌部上<sub>二</sub>神璽之鏡劔<sub>一</sub>。<sup>(18)</sup>

とある、また『日本書紀』持統四年春正月条にも、

(前略) 神祇伯中臣大嶋朝臣詠<sub>二</sub>天神寿詞<sub>一</sub>畢忌部宿禰色  
夫知奉<sub>二</sub>上神璽劔鏡於皇后<sub>一</sub>。皇后即<sub>二</sub>天皇位<sub>一</sub>。

とあって、忌部は大嘗会の際に神璽の劔鏡を奉上し、儀礼  
に参加していることが知られる。このことからすれば神龜  
三年に見える「神宝劔鏡」の献上は、忌部宿禰子首の主導  
のもとに、『出雲国造神賀詞』奏上儀礼の内に組み入れら  
れ、形成された可能性が極めて高いと思われる<sup>(19)</sup>。また、  
「神賀詞」奏上初見記事である果安の奏上時に見えず、聖  
武天皇即位期の神龜三年二月広嶋奏上時に現われているの  
には、何らかの意味が含まれているものと考えられる。

「神賀詞」奏上に先立つ潔斎については靈龜二年の果安、  
神龜三年の広嶋の二例のみにそれぞれ「齋竟」「齋事畢」  
とあり他には見られない点に注意される。また、表記様式  
の相異はあるが、「奏<sub>二</sub>神賀詞<sub>一</sub>」と見えないのは、門起を  
除くと神龜三年の広嶋と天長七年の豊持のみである。

ここで表Ⅲを参考として頂きたい。この表は郡司が国造  
あるいは神主を兼任していることが確認できる意字・名草  
・宗形の三郡大領の叙位についてまとめたものである。

出雲国造の場合、果安・広嶋以外の国造は、史料上確認  
できる範囲内で全て「神賀詞」奏上の際、外從五位下に叙  
せられている。宗形郡に關しても全て外五位に叙せられて  
いる点に気が付く。所謂「神郡」と呼称される地域の出雲  
国意宇郡、筑前国宗形郡大領が郡大領としては「外五位」

表III

国造	叙位記事	年月日	出典
果安	外正七位上↓?	靈龜二・二・十	『続日本紀』
広嶋	外從七位下↓從六位上	神龜元・正・二十八	『』
〃	從六位上↓正六位上	神龜三・二・二	『』
〃	外正六位上	天平五・二・三十	『出雲国風土記』
〃	外正六位上	天平五・八・二十	『出雲国計会帳』
〃	外正位位上↓外從五位下	天平十・二・十九	『続日本紀』
弟山	外從七位下↓外從六位下	天平十八・三・七	『』
〃	外正六位上↓外從五位下	天平勝宝二・二・四	『』
〃	外正六位上↓外從五位下	天平勝宝三・二・二十二	『』
〃	外從五位下↓?	天平宝字八・正・二十	『』
益方	外從七位下	神護景雲元・二・十四	『』
〃	外從六位下↓外從五位下	神護景雲二・二・五	『』
〃	外從五位下	宝龜四・九・八	『』
国上	外正八位上↓外從五位下	延曆四・二・十八	『』
〃	?	延曆五・二・九	『』
人長	從六位下	延曆九・四・十七	『』

〃	外正六位上↓外從五位下	延曆十四・二・二十六	『類聚国史』
門起	外正六位上↓外從五位下	延曆二十四・九・二十七	『日本後紀』
旅人	外從七位下↓外從五位下	弘仁二・三・二十七	『類聚国史』
〃	外從五位下	弘仁三・三・十五	『』
豐持	從八位下↓?	天長三・三・二十九	『類聚国史』
〃	?	天長七・四・二	『』
〃	?	天長十・四・二十五	『続日本後紀』

## 紀伊国名草郡

摩祖	外從八位上↓外從七位下	神龜元・十・十六	『続日本紀』
豐嶋	正八位上	天平元・三・二十七	『』
国栖	正七位上	天平神護元・十・二十七	『』
五百友	外從八位上	延曆九・五・八	『』
豐成	?	延曆二十三・十・十二	『日本後紀』
高繼	?	嘉祥二・閏十二・二十一	『続日本後紀』
統前国宗形郡			
等抒	外從五位下↓外從五位上	和銅二・五・五	『続日本紀』
鳥麻呂	外從七位上↓外從五位下	天平元・四・五	『』
与呂志	外從八位上↓外從五位下	天平十七・六・十四	『』

深 津	外従六位下→外従五位下	神護景雲元・八・四	『 』
大 徳	外従八位上→外従五位下	宝龜九・四・十四	『 』
國 造	叙位記事	年 月 日	出 典

という格段の叙位が行なわれているのは、郡大領が国造・神主を兼帯するという特殊性に依拠したものと考えられる。なお『続日本紀』天平元年四月乙丑条には、

筑前国宗形郡大領外従七位上宗形朝臣鳥麻呂奏「可<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>奉神斎<sub>一</sub>之状」。授<sub>二</sub>外従五位下<sub>一</sub>賜<sub>二</sub>物有数<sub>一</sub>。

とあって、この「供<sub>二</sub>奉神斎<sub>一</sub>」は、恐らく前掲延暦十七年太政官符に見える神主兼任を指示しているものと思われる。この意字・宗形郡大領の二例から推察する限りでは、郡大領が国造・神主即ち祭儀に關係する地位に就いた場合、一挙に五位まで叙せられていたと考えられる。

しかし、出雲国造の場合六国史に見える国造の全てがそうとは言い切れない部分もある。果安の場合、外正七位上とあり「進位」とあるのみで、「神賀詞」奏上による叙位が具体的に何位であったかは不明であるが、広嶋の場合は他の出雲国造とは異なり「神賀詞」奏上による叙位は神龜

三年の「外正六位上」であり、「外五位」に叙せられたのは十二年後の天平十年二月に「外従五位下」が叙位されている。

ここで注意しなければならないのは、国造任命で「神賀詞」奏上ではなく、「外五位」に叙位されている場合である。出雲国に關しては、国造任命・「神賀詞」奏上<sub>二</sub>「叙<sub>二</sub>外五位<sub>一</sub>」が成立するのは聖武天皇の時、果安・広嶋の「神賀詞」奏上時には、まだ確立していなかったのではなかろうか。

こうして見てみると、聖武天皇即位期の「神賀詞」奏上は、他の奏上とに差異が認められるように思われる。すなわち、聖武天皇即位期の「神賀詞」奏上が他例と異っている理由の一つは、聖武天皇即位事情に起因しているのではあるまいか。文武天皇崩御以前にすでに誕生していた首皇子は、次期皇位継承者と考えられていたと思われるが、文武崩御の後元明・元正天皇という中継ぎの、しかも女帝が即位し聖武へと皇位を継承してきた。その過程の中で、

「不改常典」まで持ち出して、聖武天皇即位の正当性を強調してきたのである。

聖武天皇即位期の「出雲国造神賀詞」奏上が他の奏上記事との間に微妙な差異が認められ、「神宝献上」が広嶋の奏上内に見られるのも聖武天皇即位事情に關つてのものと考へてみたい。

#### （2）はじめにかえて

出雲国造による「神賀詞」奏上、特に八世紀初頭の「神賀詞」に注目して出雲国造の特殊性について検討を加えてみたが、以上のことから考へられる点について最後に述べてみたい。

（1）『出雲国造神賀詞』奏上儀礼は、これまで通説とされてきた国造職継承に伴う新任国造の天皇への服属儀礼とは考へ難い。

（2）天皇即位時期と「神賀詞」奏上儀礼の執行時期とを對比させてみると、「神賀詞」奏上は新任国造の就任（服属の誓盟を含む）儀礼というよりも、天皇即位の際律令国家によって強制的に出雲国造職の交替が断行され、前任国造は先帝の崩御ないし讓位とともに国造職を辞し、新たに即位した天皇に対しては新任国造が「神

賀詞」奏上によって、その即位と統治の「さきわい」を祈る儀式、即ちまさに天皇の即位儀礼の一環であったと考へられる。

（3）「神賀詞」奏上の史料上の初見は靈龜二年であるが、その成立は大寶二年の諸国国造の中央召集に起因し、同年の「大發」に貢獻した忌部宿禰子首の「出雲守」就任をもって「神賀詞」奏上儀礼が整ったものと思われること。

（4）それは、忌部氏の有していた職能・性格とも密接に關わるものであったと考へられる。

（5）また、「特殊地域」と考へられ、所謂「神郡」と呼ばれている八郡の中で国造・神主を兼任する意宇郡・宗形郡大領は兼任と同時に郡大領としては特段の「外五位」の叙位が見られるのは、国造・神主の祭儀において持つ重要性に由来するものである。

また右の（1）（5）とは別に、聖武天皇即位時の広嶋の奏上に他の奏上との間に著しい相異が認められるのは、聖武天皇即位過程に密接に關わるものと考えられる。

即ち諸国国造を代表して出雲国造によって奏上される「神賀詞」は、踐祚<sub>二</sub>即位儀に見られる祭祀などとともに天皇即位の正当性を主張する儀式の一つとして新たに加えられたものではないかと考へられる。

出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立(大浦)

それは、この時期初めて「神宝獻上」が現われることに加えて、奏上記事中聖武のそれが最も盛大であったことによっても窺うことができる。

なお諸国国造が中央に召集される史料が大宝二年以降見えなくなったのは、出雲国造が「諸国国造」を代表して、「神賀詞」奏上を行なうようになり、諸国国造の中央(天皇)に対する忠誓の証を出雲国造一身に荷わせ、「神賀詞」奏上という国家的儀礼の中に取り込み、且天皇即位の正当性を明確化するために成立した結果であったと考えられるのである。

- 註
- (1) 「国造」制に関する論考としては、新野直吉(『研究史 国造』吉川弘文館、一九七四年)を参照。
  - (2) 永野裕(『古代の出雲』吉川弘文館、一九七二年)、新野直吉「古代出雲の国造」(『出雲学論攷』日本教文社、一九七七年)、門脇禎二(『出雲の古代史』NHKブックス、一九七六年)
  - (3) 高嶋弘志「律令新国造についての一試論」(『日本古代史論考』吉川弘文館、一九八〇年)
  - (4) 篠川賢「律令制下の国造」(『国造制の成立と展開』吉川弘文館、一九八五年)
  - (5) 拙稿「選叙令集解同司主典条釈説所引太政官処分について」(『古代史研究』3 一九八五年)
  - (6) 『類聚三代格』延暦十七年三月廿九日(新訂増補国史大系)

- (7) 『大日本古文書』一—五九三
- (8) 『延喜式』卷八神祇八 祝詞(新訂増補国史大系)
- (9) 新野直吉(『国造と県主』至文堂 一九八一年)
- (10) 『続日本紀』大宝二年二月十八日(新訂増補国史大系)
- (11) 矢野建一「律令国家の祭祀と天皇」(『歴史学研究』五六〇 一九八六年度大会報告 一九八六年)
- (12) 『続日本紀』大宝二年三月十二日(前掲書)
- (13) 『続日本紀』大宝二年三月十一日(前掲書)
- (14) 『続日本紀』和銅元年三月十三日(前掲書)
- (15) 『出雲国風土記』意宇郡忌部神戸(日本古典文学大系 岩波書店)
- (16) 瀧音能之「出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立過程」(遠藤元男先生頌寿記念『日本古代史論苑』国書刊行会 一九八三年)
- (17) 『養老』神祇令季冬条
- (18) 『養老』神祇令踐祚条
- (19) 門脇禎二氏は『出雲の古代史』の中で、出雲国造神賀詞は国司忌部宿禰子首と出雲国造果安の談合によってととのえあげられたものと述べられている。

(立教大学文学研究科史学専攻博士課程前期課程)